

## ヴォランティア・アソシエーションの発達社会学的分析

— 青年サークルにおける「余暇善用型の克服」をめぐる —

### A Case Study of a Youth Chorus Circle (2)

-Mainly on the Change of "Leisure-oriented Type" in the  
Voluntary Association-

大 坪 正 一\*

Shoichi OTSUBO

#### 論文要旨

仙台市の青年合唱サークルを、個人の発達にかかわるヴォランティア・アソシエーション（V・A）の意義を明らかにするための事例としてとりあげ、余暇善用志向の克服をめぐる個人の態度決定の変化を中心に分析を行う。15年の歩みの中で2度の画期があったが、集団としては2つのタイプに分けられることが論証され、世代としては3つの集団に分けることができた。余暇善用やサークル志向から運動志向へと変化するケースが特徴的にみられたのは両タイプを経験した世代であったことから、V・Aのタイプそのものが発達を規定するものではないこと、集団の持続の論理を否定した形で生み出される個人の活動の持続性とその条件を作り出すことが、余暇善用型の克服を目指すV・Aの課題であり、成員の発達に関与するとはいってもインフォーマルな形で展開される傾向の強い集団の教育力は、外側との関わりを意識的に追求することによって発揮されることが提起された。

#### 1. はじめに

本稿で取り上げた事例は、「ヴォランティア・アソシエーションにおける教育実践の基礎構造」（論文(1)と記す）に掲載されている仙台市の青年合唱サークルである。（『弘前大学教育学部紀要』第60号 1988年）よって、本稿は論文(1)の続編に当たるものである。

論文(1)では、サークル活動の自己展開を追うことによって、社会と集団に関してサークル自体の持っている矛盾を活動の中でどう展開してきたのかという、自己教育過程の基礎構造を問題にして、ヴォランティア・アソシエーション（V・Aと記す）の教育的意義を検討した。これを受けて、本稿では、V・Aにおける個人の発達の問題を、個人の態度決定に関わるサークル実践の課題を中心に検討を加える。すなわち、第2の調査課題として論文(1)で示しておいた、「青年期の集団として個人の持つ矛盾を活動の中でどう展開してきたのか」を、集団構造及び活動の画期とのかねあいで論証することを目的とする。

集団に即して、「青年期における発達」を社会学的に捉える場合、機能主義をパラダイムとした教育社会学研究では、青年期の「発達課題」を設定し、それに対して各集団がどうかかわりかつ青年はどう対応すべきかを論証する方法がとられている<sup>(1)</sup>。そこでは、家庭、学校、職場集団が中心であり、V・Aのような主体的に作り出す集団での研究の蓄積は少ない。集団と個人を規定関係として一方的に捉えるといったような機能主義的方法ではなくて、双方が発達しつつある過程として実証する発達社会学的方法では、個人の能動性（自己教育への転化）を引き起こす教育実践の過程の実証分析を通じて、集団の教育的意義を解明するという方法が取られる。それは、集団自体の発達（展開）と成員の発達の過程を同時に捉えることである。

\* 弘前大学教育学部教育学科教室

Department of Pedagogy, Faculty of Education, Hirosaki University

例えば論文(1)では、70年代以降の都市青年サークル活動の実践的課題が4点にわたって示されていた。第1は、成員の要求の尊重とサークルの民主的運営がなければサークルは発展しないということ＝「サークルの民主的運営」に関わる点である。第2は、「余暇善用」のサークル観から「生活と社会を見つめ、正しいものの見方を身につける」サークル観に移らなければサークルは発展しないこと＝「余暇善用型の克服」の課題である。第3は、サークルの発展はサークル内部の努力とともに、外部、すなわち社会的条件を有利にすることも必要であること＝「社会的条件の獲得」に関わる点である。第4は、これらを遂行して行くために不可欠な教育学習の発展＝「学習内容の科学化」である。以上はサークル活動が停滞したり崩壊したりしないための、集団自体の持つ発達課題でもあった。成員は集団を自己展開させながら、それらを自分自身の発達の課題として一つ一つ達成に向けて努力してきたのである。サークルの自己展開＝性格の変化などの中に個人が参加してきたということは、展開に関わって何等かの影響を受けてきた（つくりだしてきた）ということではあるが、V・Aとして存在してきた以上、とりわけ教育活動がインフォーマル性を基本とした活動において、集団の発達と成員の発達の不整合性の点が論文(1)では仮説として示されたのである。発達心理学的に分析された青年の発達課題（例えばエリクソンによる「アイデンティティーの獲得」<sup>(2)</sup>など）は、青年の全生活を通して獲得すべき課題であり、サークル活動だけによって全てを実現させることはできない。サークル活動の意義は、この点を認めながら、成員の意志と自発性を尊重し活動の発展の中で「民主主義の学校」として機能し、自分自身の意識が変革されて行くような生き生きとした青年をつくりあげていくこと、そうした活動がそれぞれの場（地域）を民主的に変革していくことにある。「サークル化」と「運動化」の矛盾を原動力とし、教育から自己教育への転化、更に自己変革から人間変革へという自己教育運動へと発展する中で、集団の課題がそうであったような、地域の諸関係を我がものとする自治能力を発達させる過程に結び付いていたのかどうか問われるのである。

サークル実践の課題が示しているところからすれば、確かに「民主的運営を実現できる能力」や「社会的条件を獲得していける力」「学習内容を教育プログラム化していける力」などが養成されると思えるが、青年期においてサークル的人間関係を体験するものとししないものの一番大きな違いは、自己と集団との関わり方の意識である。その志向性の変革によって、上述した運営に対する力や教育実践への力（教育主体への発達）が発揮されることになる。この点を検討する際に、4点に示したサークル実践の課題のうちで最も個人の態度決定に関わるのは、第2の課題＝「余暇善用型の克服」であると考えられる。また、現実の市町村公的社會教育の現場においても、サークル・グループの組織化において、「参加者の固定化、減少」や「余裕のある人だけの参加」のあり方が問題とされており、特に青年・成人の教育計画をする際に重要な検討課題になっている。よって本稿では、V・Aが青年期の個人の発達に関わる教育的意義を実証することが目的であるが、サークルの事例の中で、成員の志向性の変化に関わる点を中心に分析を加えることとする。

## 2. サークルの画期をつくりだした集団構造

論文(1)では、1970年から1984年までの合唱団の15年の歴史において、2つの画期が認められた。画期とは活動のスタイルが明確に変化する時期であるとともに、実践における矛盾が集約された時期でもある。そして、その矛盾を「止揚」して新たな展開を集団が計ったということは、集団構造（構成）や成員自身が以前からみて明確に「変化」していることでもある。実践における矛盾とは、合唱団の「サークル化」と「運動化」との関係であり、その矛盾を原動力として合唱団は変化してきた。V・Aの展開としてみれば、「制度化されたV・Aにおける自立化の過程」→「自立後の教育力の発見の過程」→「発見後の自己教育の過程」として位置づけられる。また、活動内容としてみれば、「運動型としての性格の脱却」→「模索」→「新たな運動化」という活動の展開であった。これらの性格の変化を明示的に示したのは、第4回総会（1974年8月）、第7回総会（1978年1月）であり、サークルの15年の歩みは3期に分けることができた。そこで、これらの画期をつくりだした構造を中心に、集団と個人の発達の関係を検討することにする。

結成時から1984年4月までに、サークルに在籍したのは176名であり、そのうち167名が退団している。この数は名簿上の数とは一致していない。ここで取り上げた176名は、団員自身によって「メンバーである」と

意識された人々であって、団員登録しても1～2回出席してやめてしまった人の数はいれていない。あくまでも演奏会その他の活動を一緒にやった経験を持った人であることを条件とした。また、在籍期間も、規約上は退団届を提出して初めて退団が確認されることになっているが、そのような形でやめて行ったのはごく少数であり、多くは自然にこなくなったとか連絡だけで済ましていたことなので、特に退団時の設定では、総会でメンバー確認が行われた場合と、成員の意識の中に「やめた」ということが確認されていた時期（例えば活動や行事の連絡をしなくなったときなど）でもって設定してある。（参考資料参照）入退団者数は第1期（1970年1月～1974年8月）に108名入団で74名退団、第2期（1974年8月～1978年1月）には22名入団で39名退団、第3期（1978年1月～1984年4月）は46名入団で52名退団である。1期での数が全体の約3分の2を占めている。

サークル在籍期間（在籍者を除く）は、1年未満81名（48.5%）、1～3年未満56名（33.5%）、3～5年未満19名（11.4%）、5年以上11名（6.6%）である。半数近くが1年未満であり、平均が約1年半である。この傾向は、入団時期別でも大きな変化はない。結成時からずっとやめずに在籍しているのは1名のみである。（団員番号5・女）また、リーダーとして総会でもって選出された運営委員をとりあげてみると、男女比では男16名に対して女22名と、合唱団のメンバー構成を反映して女の比率がやや高くなっている。第3回と第4回総会の間に臨時総会があり、その時点でのリーダーの入れ替えがあるが、大体が総会までの任期を勤めている。任期途中でやめているのは第5回や第11回総会時の委員であり、活動の停滞の時期との関連を見ている。規約や活動の方向性が確認された第2回総会時の運営委員の数が17名と一番多いが、その他は7名前後である。（参考資料）

そこで、画期をつくりだした集団について考察する。集団に関しては、活動の転換を明確に決定して行ったのは各総会であったことから、総会時の集団構成を例に取る。画期によって判断してみると、入団時期別にみて、第4回総会以前の入団者、第4回から第7回総会までの入団者、第7回総会以降の入団者という3期の分類が出来る。以上の分類に対して、それぞれの属性、経験、志向性の特徴をしてみる。まず属性に関しては、時期別にみると、第1期においては組織労働者の比率が半数近くであり量的にも多いのに対して、第2期以降では未組織労働者が圧倒的であることがあげられる。これは、労音のサークル員が作った合唱団ということで、労音のサークル自体の組織構成が反映されていることであるが、労音から自立した以降において、「未組織労働者が組織される場」としてのサークルの特徴が示されていることである。（表1-①）

職業に関しては、論文(1)でも指摘してあるように、仙台市の産業構成の特徴が示されている。時期別にみると1期では国鉄・電通・郵便といううたごえの職場合唱団がある職場からの入団がみられたが、2期以降はなくなっている。また、2期以降では、教員・保母・学生など、音楽教育の経験者や日常的に音楽を職業とするものの入団が多くみられている。（表1-②）

学歴をみると、以上の点はよりはっきりとした違いを示している。1期の主流を示すのは「高校卒」であるが、2期以降は「短大以上」の比率の方が多くなっている。これは70年代の後半以降における仙台市の状況を反映しているとみることできるが、「合唱をする」ということ自体が、ある程度の経験や力量を持たなくてはできないとする風潮や、うたごえサークルとは違った雰囲気を作り出して来つつあったアコールに、「下手でもいいからおもいきり歌いたい」というようなまったくの未経験者が定着しにくい傾向を生み出していたことが指摘できる。（表1-③）

このことは入団時における団員の経験にも示される。ここでは後での分析とのかねあいで、うたごえ運動の経験をひろいだした。また、「他の運動」に関しては、例えば、「労働組合に入っている」だけでは「経験あり」とせず、あくまでもその運動に積極的に関与していたのか（Sillsの言う layman ではなくて professionals として）どうかを基準とした。（表1-④）特徴としては、1期では当然のことながら、全てが労音のサークル員であるため「未経験」は存在しないが、2期以降は「未経験」者の比重が高くなっている。うたごえ運動の経験者はさほど多くはない。1期の3名のうち2名は仙台合唱団研究生修了者（団員番号35・男、63・男）で、もう1名は第8回総会以降の団長になるT（108・男）である。Tは学生のうたごえサークル「やまびこ」の創設者でもあり、また東北大学混成合唱団のメンバーでもあった。2期の1名（121・男）も仙台合唱団研究生を経験している。3期では入団者の数に比べてうたごえ運動の経験者が多いが、131(女)は「や

表1 入団時期別団員属性

		第1期	第2期	第3期	計
① 属性	組織労働者	41	4	6	51
	未組織労働者	46	11	33	90
	学 生	8	5	5	18
	その他、不明	13	2	2	17
② 職業	サービス業	36	2	12	50
	製造業	16	1	2	19
	自営・職人	2	2	2	6
	教員・保母	15	5	11	31
	国鉄・電通・郵便	9	0	1	10
	医療労働	2	3	8	13
	公務員	7	0	0	7
	学 生	7	6	5	18
	その他・不明	14	3	5	22
③ 学歴	中 学	2	3	2	7
	高 校	60	3	13	76
	短大・専門学校	9	6	19	34
	大学以上	18	9	10	37
	不 明	19	1	2	22
④ 運動経験	うたごえの経験あり	4	1	6	11
	その他の運動の経験あり	41	4	5	50
	サークルの経験あり	63	5	12	80
	未経験	0	12	23	35
⑤ 合唱経験	合唱経験者	22	12	23	57
	未経験者	54	8	18	80
	不 明	32	2	5	39
⑥ 入団時志向	運 動	6	0	0	6
	サークル	43	8	15	66
	余暇善用	59	3	7	69
	未経験	0	11	24	35
	計	108	22	46	176

まびこ」のメンバーで卒業と同時にアコールに入団，147（男），152（男），153（男）163（男）は研究生修了者である。このうち153は研究生在籍中のアコール入団であり，152，163は仙台合唱団を休団してアコールにきたものである。当時仙台合唱団とアコールは高平つぐゆき氏という同じ指揮者が指導していたが，音楽性の違いに目を向けるものばかりでなく，運動を余り意識しない「サークルの雰囲気」に魅力を感じているうたごえの合唱団員もいたわけである。またこれとは反対に，158（女）は「まびこ」の経験があり仙台市に就職していたが1年後にアコールに入団，そしてそのわずか数カ月後には同時に仙台合唱団の研究生に入団している。しかし，1期の3名をのぞいては，音楽リーダーとして力量を発揮した131以外は，在籍期間も短く，アコールの団運営その他に関して余り重要な役割を発揮しなかった。「運動として組織化していこう」あるいは「うたごえ運動とのパイプをつなぐことによって合唱団を発展させよう」という志向を持っていたのは1期の3名であって，2期以降の経験者は，むしろ，仙台合唱団やうたごえで満たされないものを求めて入団してきたものといえよう。「その他の運動経験者」に関しては，1期では労音事務局という労音運動を担っていた人々が主流であるが，同時に国鉄，郵便，自治体，教員などの労働組合運動に積極的に参加していたメンバーも多い。2期以降は運動経験者の数もずっと少なくなり，その内容も，文化運動や学生運動と

いった領域であり、「労働運動の活動家」といったメンバーは入ってこなかった。

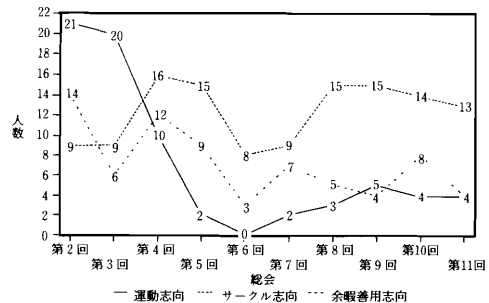
合唱の経験を見ると、比率としては2期以降に経験者の割合が高くなっている。(表1-⑤) このことは、とりわけ第3回演奏会での「山芋」や「マドリガル集」、3期以降のKによる創作曲集など、混成4部の大曲をアコールドサウンドとして歌いこなしたと無関係ではない。(論文(1)参考資料II参照)「おもいきり歌う」あるいはサークルの組織化目指して強烈な主張を歌いあげるといったものから、創造内容自体も変化していった基盤にもなっている。

次に団員のサークルに対する志向性についてみることにする。「志向性」とは、団員がサークルに対してどのような意義を感じ、サークルをどういった方向に発展させようかとする意識を問うているものである。その基本は、論文(1)で指摘したように、「サークル」志向と「運動」志向であり、またどちらにも明確な意識を持たない「無志向」である。「無志向」という志向はあり得ないので、これを分析すると、集団やサークルの経験がまったくないのかとサークルについて行くだけという、新入団員によくみられるような立場、いわゆる「未経験」の層と、とにかく何か自分にとって有意義のものであればいいとする「余暇善用」志向に分けられる。ここでいう「余暇善用」志向の特徴は、「歌がうまく歌えるようになりたい」とか「自分を鍛えたい」、「友達がほしい」といったような要求を含んでいるが、それらに共通するものは「サークル自体を変える」という志向ではなくて自分との関わりにおいてのみサークルの活動に参加するという志向である。いわば、「自己変革」を主たる対象として活動に望んでいるという段階のものである。これに対して、「運動化」や「サークル化」は明らかに他人を意識して活動に参加しており、自己変革から「人間変革」への意識・態度がみられるものとして区別した。

V・Aとしてのサークルにとって、その活動展開に最も影響を及ぼすものが、個人の態度決定であることは、民主的な集団であればあるほど重要なものであることは疑い得ない。そこでまず入団時における志向を時期別にみると次のような特徴がみられる。(表1-⑥) はじめから「運動」の志向を持って入団するメンバーがいたのは結成時と労音事務局の大量入団(1971年1月)があった1期のことである。この場合「運動」とは労音運動の組織化ということである。2期以降には当然のことながら「運動」を意識して入団する団員はいない。また、1期における「サークル」志向は、労音のサークル員による他サークル員との交流という意味で合唱団に期待を持つ要求が強かったのに対して、2期以降は未経験者がサークルを体験したいという要求や、アコールドの活動を見てからその雰囲気に対する期待を示しているという点での相違がある。入団者がうたごえ運動の経験者、あるいは現に活動に参加している場合であっても同様であることは前に述べた通りである。そこで、これらの志向を持つ団員がサークルの活動をどの様に展開させてきたのかについて、総会時に見られる団員構成を例にみってみる。(図1)

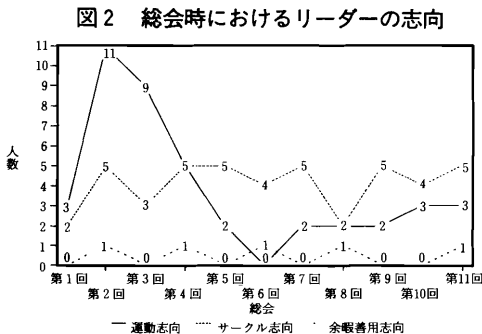
画期として示された第4回と第7回総会ではどのような団員の志向変化との関係があるか。第1回総会は実質的には結成の為の集まりということなので図には載せていないが、2回、3回総会では「運動」志向が圧倒している。しかし、4回総会において「サークル」志向が伸びをみせて「運動」と逆転していることが分かる。「余暇善用」は合唱団の方向を決めた第2回総会(規約の決定)以降半減しているのに対し、4回総会でまた伸びている。「運動」で減ったものを見ると、転出した20(男)を除いては、まず47(女・2期運営委員)は仙台合唱団28期研究生に入団するために退団、58(女・3期運営委員)も29期研究生及びうたごえのアコーディオン教室14期生となって退団した。また44(男)はとなりの多賀城市に多賀城合唱団といううたごえの合唱団を自ら結成し初代団長となり退団、60(男)も郵便のうたごえサークル「きぼこ」の中心的メンバーとして参加するために退団して行った。(その後、サークル代表者となったほか、宮城のうたごえ実行委員会常任委員、郵便のうたごえ全国祭典事務局長などを務めた。)いわば入団時にはうたごえの経験はなかったものの、合唱団活動の中でうたごえ運動を自覚してそれぞれの地域・職場に直接運動を広げるために飛

図1 総会時における団員の志向別変化



び込んで行った人々が出てきたということである。労音運動の組織化を強く意識していた3, 13, 43 (いずれも男)は、合唱団の体制を整えた後、第3回総会までには退団していたし、労音の運営委員でもあった27, 34, 31 (いずれも女)は「方針転換」以降の労音の活動からとうざり始めていた。よって、第4回総会時に「運動」志向をもっていったのは10名であるが、前述した35, 63という研究生修了者のほかにも、6 (女)=自治体, 26 (男)=郵便, 38 (男)=国鉄, 55 (男)=電通, 76 (女)=保母と、それぞれが職場のうたごえサークルと深いつながりを持つ活動家の比重が高かった。なお、「余暇善用」の数の伸びはこの間の新入団員(10名)によるものである。これらの大多数は第5回総会までに退団しており、サークル運営に対しては余り影響を与えていない。

合唱団の活動方針の変化は、次のリーダーの志向変化によってより明瞭に表される。(図2)2回, 3回総会において「運動」志向のリーダーが数的にも多く運営をリードしていたが、第4回総会において「運動」と「サークル」が同数というバランスになり、第5回で「運動」志向のリーダーが2名(38, 6=初代団長の



D)に減少してしまうのである。この間1期中の核を担った多くの団員は第3回演奏会(75年6月)を契機に退団していったし、38は総会2カ月後には転勤のため団を離れ、Dもまもなく「産休」となり実質的運営は団長代理のTに移った。第6回総会では「運動」志向の団員は一人もいなくなるのである。こうしてみると、第1の画期とは、「運動型からの脱却」としてのV・Aの変化として位置づけられたが、第4回総会を契機として、リーダー、団員双方から「運動」志向が減少して行く過程であったといえる。「サークル性を大事にする」という次の世代のメンバーが残ったのに対して、労音運動志向グループが抜けたこと(その後労音の方針転換が仙台労音の中心部分にある程度の混乱を引き起こしていたことも重要な一因となっているが)、うたごえ運動志向を作り上げたメンバーはサークル自体を変えるというよりも直接うたごえのサークルに入って行ったことが、「運動型」から「サークル型」への転換(実質的には「模索」といえる状態を作り出した)を引き起こしたのである。

第2の画期は第7回総会(78年1月)である。活動の停滞から再生に転じて行く時期であることは論文(1)で述べた通りであるが、団員の特徴としては、「運動」志向を持つものが生まれたことである。この場合の「運動」とは、労音運動ではなく、うたごえ運動乃至はその外延部にアコールを位置づけようとするものである。(85=運営委員のY, 117=同O) Yは35期研究生に入団(77年5月), Oは宮城のうたごえ実行委員会のアコールからの代表者(同時にYも)として、それぞれがうたごえ運動に関わっていった。また、レッスン研究部長のKも音楽リーダーとしてうたごえのイベントに積極的に協力し始めていた。第2期に入団してその後もサークルに残った団員は少ないが、「サークル性」を全面に出したこの期の活動にうまくとけ込めたものが、その後もこの「アコールの雰囲気」を大事にしながらか「サークル志向」を強めて行った。(122=女・音楽リーダー, 123=女・8, 9期運営委員, 126=女・7, 10, 11期運営委員など)よって、この間の新入団員は「未経験」を始め「余暇善用」志向が中心ではあったが、第7回総会以降「運動」志向リーダーの定着と共に、「サークル」志向型の中心メンバーが急増し高い比重を占めてくるのである。「運動」志向の中核リーダーと多数の「サークル」志向のメンバーのバランスを団長のTがうけもつといった構造で、この時期以降の合唱団が運営されて行ったのである。(T自身は、職場の勤務条件もあってうたごえ運動に全面的に取り組むといった対応をみせることはできず、サークルの雰囲気を代表する形での位置を占めていたが、学生のうたごえサークル「やまびこ」の創設者の一人であったことは前に述べたとうりである。)このようにして、合唱団の活動の定着=自己教育の展開が計られ、「新たな運動化」としてのスタイルを形成して行くことが出来たのである。この時期以降、リーダーばかりでなく団員の中にもの中に「運動化」志向者を増やして行ったことが見られるが、合唱団自体の活動もうたごえ運動としての活動内容が中心となる団員の比率が高まっていった。当時、宮城のうたごえ協議会や仙台合唱団などが企画する行事・イベントや、うたごえが参加、

第2の画期は第7回総会(78年1月)である。活動の停滞から再生に転じて行く時期であることは論文(1)で述べた通りであるが、団員の特徴としては、「運動」志向を持つものが生まれたことである。この場合の「運動」とは、労音運動ではなく、うたごえ運動乃至はその外延部にアコールを位置づけようとするものである。

(85=運営委員のY, 117=同O) Yは35期研究生に入団(77年5月), Oは宮城のうたごえ実行委員会のアコールからの代表者(同時にYも)として、それぞれがうたごえ運動に関わっていった。また、レッスン研究部長のKも音楽リーダーとしてうたごえのイベントに積極的に協力し始めていた。第2期に入団してその後もサークルに残った団員は少ないが、「サークル性」を全面に出したこの期の活動にうまくとけ込めたものが、その後もこの「アコールの雰囲気」を大事にしながらか「サークル志向」を強めて行った。(122=女・音楽リーダー, 123=女・8, 9期運営委員, 126=女・7, 10, 11期運営委員など)よって、この間の新入団員は「未経験」を始め「余暇善用」志向が中心ではあったが、第7回総会以降「運動」志向リーダーの定着と共に、「サークル」志向型の中心メンバーが急増し高い比重を占めてくるのである。「運動」志向の中核リーダーと多数の「サークル」志向のメンバーのバランスを団長のTがうけもつといった構造で、この時期以降の合唱団が運営されて行ったのである。(T自身は、職場の勤務条件もあってうたごえ運動に全面的に取り組むといった対応をみせることはできず、サークルの雰囲気を代表する形での位置を占めていたが、学生のうたごえサークル「やまびこ」の創設者の一人であったことは前に述べたとうりである。)このようにして、合唱団の活動の定着=自己教育の展開が計られ、「新たな運動化」としてのスタイルを形成して行くことが出来たのである。この時期以降、リーダーばかりでなく団員の中にもの中に「運動化」志向者を増やして行ったことが見られるが、合唱団自体の活動もうたごえ運動としての活動内容が中心となる団員の比率が高まっていった。当時、宮城のうたごえ協議会や仙台合唱団などが企画する行事・イベントや、うたごえが参加、

協力する催し（平和運動や文化運動など）は月に1回以上は取り組まれており、サークルにおいてもそのためのレッスンを始め会議や作業などで、ほぼ連日には集まるといったような活動が展開されていた。アコールも、リーダーばかりでなくやる気のある場合は新人でも実行委員その他になって、他団体との交流や協力活動を展開する団員も多かった。（この時期のうたごえ運動の取り組みについては、論文(1)の参考資料I参照）

図3は、団員のサークル活動に対する内容を総会時の比率で示したものである。うたごえ運動の活動に積極的に関わっている団員、サークルの活動に積極的に関わっている団員、その他の活動の方が大事だという関わりを示している団員という3種類に分類した結果である。ここでの基準は、サークルへの出席率と共に、特に「うたごえ運動」としたものは、(1)うたごえ運動

が主催する催しの実行委員・役員になっている、(2)日本のうたごえ全国協議会の機関紙「うたごえ新聞」の読者である、(3)仙台合唱団が主催する声楽レッスンの受講者である、(4)うたごえ祭典等に参加している、(5)うたごえ運動の理念を理解している（うたごえ運動の理念についてはかなり多面的に理解することが出来るが、一応基本となるのは次の3点である。1.「歌は闘いと共に」2.「うたごえは平和の力」3.「1人が1人をさそう運動である」）、(6)自分の合唱団もうたごえ運動と連帯する方向で伸びるべきだと言う考えを持っている、という6つの基準の比重で判断してある。第1の画期においては、志向性のグラフと同様に「うたごえ運動」と「その他の活動」（この場合は、「余暇善用活動」ばかりではなく、労働運動や他の文化運動での活動が中心となった人々も含まれている。）の逆転傾向が示されている。第2の画期では、「うたごえ運動」が伸び始めているのと共に、「サークル中心」がトップとなり「その他の活動」と逆転している。すなわち、1期と3期での合唱団の活動スタイルの違いは、1期では「運動型」の前進（それは労音運動からうたごえ運動への志向性の変化）によってサークルを安定させてきたのに対し、3期ではむしろ、「サークル中心」のスタイルが核となって合唱団を安定化させ、その中で徐々に「うたごえ運動」のスタイルを前進させてきたという特徴がある。また、運動志向が多くてうたごえ運動での活動の比重も高かった1期（同時にリーダーの志向も「運動」が圧倒的である）に比べて、運動志向はさほど高くないにもかかわらず活動内容はうたごえ運動での活動が多いのが3期である。

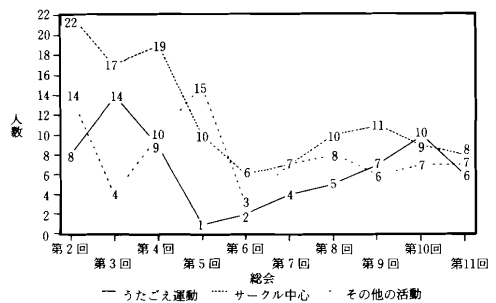
以上のように、2回にわたって現れた活動の画期を構成した要因は、成員属性の変化があると同時に、成員の志向性の変化と活動内容の変化が、集団の構造を変化させることによって構成されてきたものである。

「運動化」と「サークル化」の矛盾はこれらの変化を押し進め、特にリーダーによって担われた「運動」の型が、方向を決定する上での大きな要因になっていたといえるであろう。そのうち、第1の画期は、V・Aとしてみれば、「要求実現型」V・Aが運動志向の減少とサークル志向の増加の中で「理念主義型」へと変化するV・A自体の性格の変化をもたらす画期であったのに対し、第2の画期は、「理念主義型」を前提とする「模索」の時期が、運動志向の増加によって「理念主義型」V・Aを確立する、いわば、サークルの発展をもたらしてくる画期であったと言える。すなわち、V・Aとしての集団構造は第1の画期で区切られる2つの型があり、個人の発達をめぐる集団の教育的意義を考察する場合においては、2つの時期（前期集団と後期集団）でもって考察を加えるべきであることが結論づけられる。<sup>(3)</sup>

### 3. 集団構造と「余暇善用志向」の克服

V・Aの活動においては、集団の志向性＝活動方針と成員の志向性ないしはその変化は、整合的であったり不整合であったりする。この事実は、成員の発達に関わるV・Aの意義を検討する際にどのように位置づけるのか、以下この点の検討をする。V・Aの基本的タイプとして「理念主義型」と「要求運動型」があるとはいえ、論文(1)でも示したように、一般化された場合のV・Aの基礎構造は、「矛盾の関係を維持し続ける構

図3 総会時における団員の活動内容別変化



造」(理想主義型にならない構造, 要求運動型にならない構造)によって示される。しかし, 現実に活動しつつあるV・Aの集団構造は, A, 「理想主義型に向かいつつある構造」, B, 「要求運動型に向かいつつある構造」, の2つのタイプに分けられ, V・Aとしての活動の展開の中ではタイプが変わることがあり得ることを示している。これらを規定するのが成員の志向性の変化にあることは前に述べた通りである。合唱団の事例で言えば, 前期が示している基本構造はAタイプであり, 後期はBタイプとして把握することが出来る。1つのV・Aの歴史において2つのタイプが確認されたのは, なんとと言っても15年という歴史の長さからくるものである。しかし, ここでは成員の志向性の変化とV・Aの構造の関係を明確にするためにも, 「余暇善用型の克服」をめぐる成員の志向性の変化を, 2つの時期の示す集団構造による比較によって検討するものである。

集団構造を構成しているメンバーを「世代」としてみると, ①前期にのみ在籍していた世代(第4回総会以前に退団した世代), ②前期, 後期にまたがって在籍した世代, ③後期にのみ在籍した世代(第4回総会以降の入団者), の3つの世代に分けることが出来る。(便宜上「前期集団①」, 「前期集団②」, 「後期集団」と名付ける。)すなわち, A, Bタイプという1つのV・Aのみの経験者とA, B両タイプのV・Aを経験した者の相違である。2つのタイプの集団にわたる3つの世代が「余暇善用型の克服」をめぐるどのような志向性変化の特徴があるか, この点を中心に以降の分析を加えることにする。(図4)

図4 世代別在籍人数

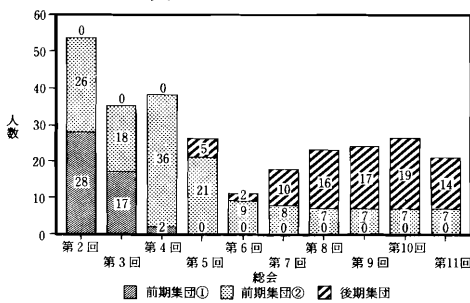
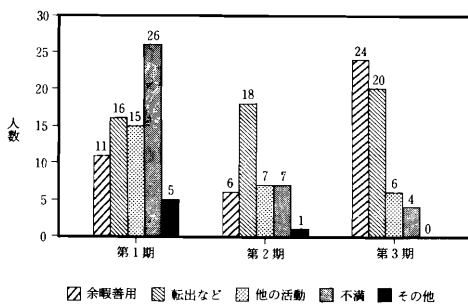


図5 退団理由(退団時期別)



V・Aでの活動を通じた最終的な志向性の変化は, 入団時の志向に対する退団時の志向によって示される。(やめるまでの間での志向変化も存在するが一図1参照一, ここでは青年期とのかかわり合いでのV・Aの意義が対象となるので, 最終的な結論を対象とし, やめ方によって分析を進めることとする。)退団時の志向とは退団直後にどのような活動に飛び込んでいったのかということであり, サークルの「やめ方」に関するものである。そこに集団活動を通じた個人の変化(発達)の姿を「余暇善用」や「無志向」の変化として実証する。退団理由を退団時期別に現したのが図5である。転出などのように物理的条件によってやめざるをえなかったもの以外には, 合唱団の活動内容自体に対する不満(もっと楽な合唱活動をやりたい, 選曲内容等の不満など), 合唱団に不満はないが他の活動(その他の文化活動や社会的に意義のある活動, 労働運動など)に自分の生活の比重を移していったやめたものなど, 積極的理由をもつものと, 「もうそんなに遊んではいけない」として退団していくタイプに分けられる。後者は公式には「結婚」「出産」「仕事が忙しくなった」

等の理由で退団となった事例であるが, サークル活動自体から離れていく傾向であり, 集団と自己の関わりにおける意識としては「余暇善用」のスタイルの退団理由としてまとめられる。時期別にみると, 「やむを得ない理由」は同程度存在しているものの, 1期は「不満」が特別多く, 3期では「余暇善用」がとって変わる。V・Aのタイプの違いを示す結果ともなっている。

退団直後の活動によって志向性の変化を見ると, 集団別には次のような特徴がある。入団時志向のうち「未経験」を別個にして, 自己変革志向=「余暇善用」, 集団変革志向=「サークル」, 他者変革志向=「運動」としてタイプ分けをして, その変化を退団直後の活動でみたのが図6である。志向性の変化を問題とする場合, V・A自体を変える志向と, V・Aを通じて他者を変える志向は, V・Aという集団が持つ個人の発達に対する意義を検討する場合大きな位置を占めるが, 退団というのは, 自分にとっての発達へ向かう意義を自らが結論づけたという意識・態度を示している。在籍者の場合は, 上記2つの問題を依然として自分の課





味であり、成員の多くは他の場所でもサークル的人間関係をつくっていた。よって、自己にとつての合唱団はサークルとしては絶対なものではなく、自己の余暇活動における部分の位置づけとしてサークルに対応することができたメンバーが多かったことを示している。これに対して後期では、「未経験者」が多数を占めていることから、自己の生活にサークル的人間関係を挿入するのかがどうかわれ、活動定着の試金石となっていた。さらに、定着後にはそれを持続して行くための論理を自己及び集団が見いだすことが問われていたといえよう。アコールが後期に集団としてとつた対応は「新たな運動化」であった。しかし、この方向は集団としての方針であつて、個人の論理にまで定着させる方針＝教育活動としては具体的ではなかったのである。「余暇善用」へ変化するメンバーの相対的増大は以上の傾向と無関係ではないといえよう。

表2 集団(世代)別志向変化(%)

	運動に変化	他の運動	余暇善用	他のサークル	在籍
前期集団	38.9	4.6	30.5	22.2	3.7
*前期集団①	27.8	6.9	29.1	36.1	0
*前期集団②	61.1	0	8.3	19.5	11.1
後期集団	16.2	0	52.9	23.5	7.4

次に、志向の変化を世代別に分けてみると新たな特徴点が確認できる。(表2 前期集団①②の分類) 集団名とその集団が属していた時期のV・Aの基本的性格は前に述べたとうりである。A、B両タイプのV・Aに属していた前期集団②では、他に比べて明らかに「余暇善用」に変化する割合が少ない。前期集団①はトータルとしての前期集団に比べて後期集団との差が少なくなっている。前期集団①と②の違いは、在籍年数と経験(タイプの違うV・Aの体験)である。

在籍年数別にみると、全体として2年以下が多い中で、前期集団②だけが逆になっており、この集団の特徴を示している。前期②での2年以上在籍者は、前期①の2年以上在籍者と同じ志向変化の傾向＝「運動」へが多いが、後期での2年以上在籍者は、人数が少ないことと同時に「余暇善用」が一番多くなっている。また、2年以下在籍者を前期①と後期を比べると(前期②は人数が少ない)、後期での「余暇善用」の割合の多さが指摘できる。在籍年数の多さによる「運動」志向の増加(あるいは「余暇善用」の減少)という傾向を見いだすことはできないといえる。V・Aでの活動を通じての志向変化は、年数よりも経験を問題にすべきということが指摘できるし、逆に、運動に志向を変化させつつあるメンバーは長く在籍するというものになっている。(表3)

表3 在籍年数別志向変化(%)

	運動に変化	他の運動	余暇善用	他のサークル	在籍
前期① 2年以上	52.6	10.5	21.1	15.8	0
前期① 2年以下	18.9	5.7	32.1	21.3	0
前期② 2年以上	85.7	0	0	14.3	19.0
前期② 2年以下	36.4	0	27.2	36.4	0
後期 2年以上	23.2	0	53.8	23.2	30.8
後期 2年以下	16.0	0	56.0	26.0	2.0

世代別にこの傾向を見てみると、前期集団②の在籍期間の長さが他を圧倒している。前期集団①の平均在籍月数14ヶ月(運動に志向が変化したものの21ヶ月) 後期集団16ヶ月(同19ヶ月)であるのに対して、前期集団②は43ヶ月(同55ヶ月)となっている。全体平均では20ヶ月(同33ヶ月)である。前期①では、元々が運動的基盤を持ったメンバーが多いのであり、合唱団でのある程度の経験(演奏会など)を経たのちに元の運動に戻る(あるいは主力を注ぐ)という傾向が多い。特に入団時サークル志向から「他の運動へ」いったメンバーに見られる点であり、在籍期間の短さはそれを示している。後期集団になると、112を除くと平均在籍期間は11ヶ月と1年をきっており、大きな企画を1つ経験しただけで退団するという傾向を示している。当

時サークル結成がはかられたことによって保母のうたごえに参加していった167を除くと、合唱団での体験のみによって運動への志向を変化させたとは言い難いものである。<sup>(4)</sup>

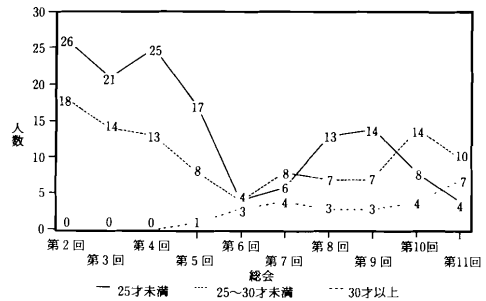
となると、前期集団②の特別な傾向を指摘せざるを得ない。ここにはさらに4名の在籍者がおり、それぞれ10年以上の活動を行っている。サークルの15年の歩みの中で、「要求運動型」→「理念主義型」→「要求運動型」のV・Aとしての性格変化があり、性格変化にともなう退団者をつくりだした一方で、違う性格の集団を体験した（順応できた）のが前期集団②の大部分である。→部分が画期に当たるとすれば、第1の画期においては「不満」を理由としての退団者が多く、第2ではその傾向がみられない。第1の画期は急激な集団の変化であったのに対して、第2での変化は集団としてはそれほど大きな変化ではなかったことがここからも指摘できる。要求運動型の脱却に中心的役割をはたしたのは、この世代の特に入団時サークル志向者であるが、それらの多くは「運動」へと変化している。いわば、運動経験を持っていたとしても、合唱団を通じてまで運動を展開するというを求めず、サークル的な結合の場を確保することが第一義的な課題であったが、集団に対する愛着を獲得した後で、「自分達の集団」の発展をめざす中で「運動」への方向を模索したということである。よって、後期集団と同様にうたごえ運動に転身したものは少ない。（55の場合は当時電通のうたごえサークルは崩壊状態であり、労働運動が主力であった。）

参考資料で画期を経験した前期集団②（5～108の36名）を見てみると、78までの18名中14名が第4回総会以前に運営委員を経験している団員であり、これらの団員が第1の画期を実現した主力であることがわかる。18名中10名が「運動に変化」であり1名は在籍、「他のサークルへ」はわずか3名にすぎない。（「他の運動へ」が6名、「余暇善用」は0）さらに、これらの多くが、第4回総会を前後して結婚していることが注目できる。（団内結婚4組、団員以外との結婚4名）団長として残った6を除いて、第5回総会を中心に退団している。総会の直前に第3回演奏会（75年6月）があったことを見ると、サークル活動としての区切りは結婚ないしは出産でつけて、最後の取り組みとして演奏会までがんばったという見方もできる。退団後多くが「運動」へ転身したとしても、V・A自体の活動によって志向が変化したとは言えないものであろう。むしろ「サークル志向」者で活動に積極的であったものの傾向を示していると言えるのではないか。自らの積極性（ヴォランタリーアクション）は、運動目的の実現よりもサークル的な人間結合におかれていたのであり、その区切りが結婚であることは青年期の集団としては当然の帰結のように思われる。（団員以外と結婚したものつきあいのある他のサークル員である。）V・Aの活動を通じて運動（特に文化運動）志向を持ったものは、画期を待たずに運動体に参加していくことにより退団しており、比較的在籍期間は短い。

第2の画期を経験した世代は、前期集団②のうちの5, 6, 34, 85, 90, 91, 95, 108, の8名と117, そ

して122～130までの9名合わせて18名である。この時期は、第1の画期時点では若手であった85, 95, 108を中心として担われていくが、その他は117を除いては第7回総会以降のリーダー層である。新しい画期をつくりだした勢力と言うよりは、結婚（団内）後も団長として残った108の合唱団活動のイメージを核として、前期集団②の若手と過去の歴史的展開からは自由である新団員との共同の取り組みが、新しい活動スタイルを創り出したということであろう。全体としてメンバーが減少する中で、25才未満の比重が下がっていた時期である。（図7）第8回総会時になってようやく若手の入団が上回ることになる。しかし、若手の中で122を除いて「運動に変化」したものはおらず、結婚後も活動を続けたのも122一人である。（84年5月に第2子出産のために退団）むしろ、比較的長く在籍し、かつ運営委員も経験したメンバーにおいても志向が変化しないというのが特徴である。これは後期集団全体を見た場合にも当てはまる。すなわち第7回総会以降合唱団の活動はある程度順調に進んでいたのであり、前期集団②との違いがあるとすれば、画期を創り出すほどの矛盾が存在しなかったか、矛盾を自覚する活動として展開しなかったということであろうか。「理念主義」が貫徹すれば極端な形で性格転換をはかる必要はない。合唱団の運動体としては身近かに仙台合唱団が存在

図7 総会時における団員の年齢構成



しているものであり、必要に応じて協力関係を打ち立てれば良かった。労音合唱団時代のような「情勢を切り拓く力」は求められてもいないし、次第に活動上の意識からとうざかっていったのである。従って、「新たな運動化」や「運動志向への変化」といってもV・Aの活動を通じてではせいぜいうたごえ運動の周辺に位置する存在であり、青年期を中心とする文化を担う運動を構築しようとするものではなかったのである。

実はこのことが、後期集団における活動上の本質的課題であったと言えるのではないか。「新たな運動化」をめざした内容が上記のものであった時に、それは青年期の団員を長く（結婚後も）つなぎ止められる性質の活動（V・Aとして）であるのかどうか、が問われていたといえよう。表4は結婚後の在籍年数を世代別に示したものである。（在籍者は除き、入団時既婚者は含んでいる。）サークル内の既婚者率は前期集団②が高く、この世代が息の長い活動を展開できた集団であったことが示されている。一方、後期集団になると、結婚と同時に退団するものが圧倒的になっている。ここには、長く在籍している団員においても、「結婚まで」という意識が強かったことが示されている。前期集団においては運動を意識した団員にとって、集団自体は青年期の「通過的集団」として意識され、ある程度の活動の後に自分の本来やりたい活動を見いだしていった。後期集団において団員の多くが感じた集団は「サークル性」といういわば青年期の「目的集団」であり、その目的を追求し続ける間の集団としての位置づけが大きいものであったといえよう。それは余暇善用志向を変革して行くほどの集団としては位置づけられなかったのである。結婚後の活動参加の状況は以上のことを示しているといえよう。新たなメンバーが次々とはいってくる傾向があれば、以上のことは余り問題にはならない。しかし、V・Aにおける「サークル志向」というのはサークルの個性を尊重した上での雰囲気を確認することであるから、新入団員にとってはとけ込むことが難しくなる。友人や職場の同僚といった「よく知っている人」をサークルに誘ってきた時期をすぎると、定着するためには困難が多くなっていたのである。（論文(1)図III参照）うたごえ運動でも指摘されていた「タコツボ化」<sup>(5)</sup>の傾向が、世代交代の時期に噴出していったといえる。

表4 結婚後の在籍者

	同時に退団	1年未満	2年未満	2年以上	計(人)	既婚者率(%)
前期集団①	1	4	3	1	9	12.5
前期集団②	3	4	5	3	15	46.9
後期集団	12	1	0	0	13	20.3
計	16	9	8	4	37	22.2

在籍者を除く  
入団時既婚者を含む

#### 4. 小括

V・Aという集団を通じての成員の発達を、志向性の変化によってみると、V・Aの集団としての性格そのものが発達を規定するという結論にはならない。V・A自体の発達（変化）はまさに個人を通じて達成されるのであるから、どのような個人がどういった性格のV・Aを作り出しているかというところがまず問われるのであり、性格を変化させた時点でのV・Aは、その流れに沿った活動に個人を参画させる条件を持っていたことに着目する必要がある。V・Aに加入したままV・Aの性格変化をはかるといふ行為は、集団を崩壊させて個人を崩壊させないという行為である。V・Aは集団の型として要求運動型になることはあるとしても、運動体とは違う性格を持つ。運動体のような強固な組織に比べて崩壊させることの自由度が高い。特に、集団の規範を浸透させるという意味での教育的活動が確立されている組織ではなく、インフォーマルな教育が基本である場合の活動において、この傾向は強いものである。シルズの実証によると、理念主義（ヴォランタリゼーション）を実現するスタイルを目標とするととき成員のヴォランタリーアクションは増大し、「生き生きとした」活動が展開できるとされている<sup>(6)</sup>。しかし、集団自体は一般的な活動ではなくて特定の目標を持ち、目標を実現させるための意図的な活動が要求されている。集団を維持し発展させるためには、以

上の行為は「運動」的でもある。この理念と運動の矛盾的關係を個人の生活スタイル—青年期の発達のあり方において—として体现できたものが集団を担うメンバーであり続けることができたのである。

青年期を迎えた個人にとって、意義のある合唱活動を展開させるということはどうたごえのような運動である必要はない。合唱活動の「先輩」あるいは教訓事例として学ぶことはあっても同じスタイルになる必然性はないし、また自分達（メンバーの個性や要求）にあった活動を展開していくことの方が自然である。そのイメージを自由に作り出せるということがV・Aであることの特典でもある。第1の画期では、労音の付属物（運動体としての性格）という集団のスタイルを変え、サークル志向を中心とした個人のイメージを押しとうした。元々の集団構造自体は「崩壊」させたということである。活動自体はヴォランタリーでありながら、目標の実現のためにまじめに課題に取り組む（ここには民主主義的な感覚が要求される）、このような資質が残ったメンバーに要請されていたのであり、その活動を展開できたものの多くがサークル志向や余暇善用志向から運動への志向に転化したということであろう。これに対して後期集団によってもたらされた第2の画期は、V・Aとしては本質的な画期ではなかった。集団の目標や方針として「新たな運動化」があったとしても、団員の志向性の変化を問うものではなかったし、余暇善用志向がサークル志向に変化した時点で留まっていた。余暇善用やサークル性を基盤にしている以上、集団は「崩壊」させるほどの意味は持ち得ない。よって、青年期を卒業した個人にとっては自己が関与をやめるという対応ですむのである。また、運動の必要性を感じる個人にとっては他に移ればよいということになる。「通過的集団」として位置づけられただけのV・Aは、集団自体が「自然消滅」する事はあっても「崩壊」するという構造にはならないのと同様に、「目的集団」として位置づけられれば、自己とその目的が合致している間のみにおける関与となり、「集団を崩壊させること」は第一義の課題とはならない。個人が集団に同化されることではなく、集団を通過していくことでもなく、集団に対する個人の能動性こそが集団を通じた自己運動としての発達のあり方である。とすれば、アコールの事例にみられる以上のスタイルは、V・Aの集団としての意義を端的に物語っているといえよう。つまり、V・Aを通じての発達は、V・Aの持続性＝その意味では青年期における個人と集団の関わりの中での持続性の中でこそ、問題にできるということである。

「集団を崩壊させて個人を崩壊させない構造」とは、言い替えば集団における「持続の論理」の否定であり、否定することによって個人としては持続的活動を展開させることができた条件である。持続的な活動の中で、多くの個人や集団との出会い、交流、共感を通じて、意識・態度の変化＝志向性の変化を創り出していったのである。以上の過程は、教育実践の過程としてみれば経験主義的なものである<sup>(7)</sup>。しかし、経験主義的なものであるがゆえに、活動する個人を発達に導くかどうかは「意欲」にかかっている。それは、自己の発達・成長をめぐる意欲でもある。活動が持続されたからこそ、自分にとっての「教育者」の発見や「確認」「実践」の過程が展開していったのである。問題は持続的な活動に適合する個人とそれを切り拓く条件をV・Aがもっているかどうかである。適合しない場合は関与をやめるか消極的関与（＝無志向ないしは余暇善用）であり続ける。この場合は逆に、その個人にとっては「持続の論理」を否定しきれない状態での集団への関与のあり方を示している。集団を「崩壊」させないことによって個人を「崩壊」させる条件を作りだし得ない＝集団を通じての個人の発達は認められないことになり、発達におけるV・Aの意義は明確化されないままに活動を展開している状態である。この種の状態にある個人の「熱心」な活動は「いい思い出づくり」になったとしても、それだけでは、余暇善用志向を変革する課題に近づくことは困難だといえるのではない。

個人としての持続的な活動の中では、集団の活動目標、個人的な状況、集団内の人間関係など、活動の継続・展開をめぐるさまざまな矛盾に直面し、個人の経験や実感だけでは乗り越えることが不可能な課題を迎えざるを得ない。働く青年の集団づくりや組織化が困難な社会的状況が存在する以上、避けてどうれないこともある。その中で、矛盾を回避する（力量以上のことはやらない）方向で行動するのか、それとも課題を一つづつ解決していく方向をとるのが、集団としての志向（運動化かサークル化か）が問われていたのである。とすれば、前期集団、後期集団の違いは、単なる構成メンバーの違いによってのみはかされるべきではない。まさに矛盾の構造を集団全体としてどう対応して行くのかの違いも形成されたのである。前期集団は、サークル化をめざしながらもその活動は運動的であり、後期はその逆に、運動をめざしながらもサークル的な活動スタイルをとっていた。ここに両者のV・Aとしての一貫性が指摘できるが、集団の発

展（活動目標の達成）と個人の活動の持続性（その条件を創り出すこと）は同時に追求されていたのである。その追求の力が教育力として展開されることが可能であり、活動の方向性とスタイルの違いによって、前期と後期では当然違った形で機能し、そのことが余暇善用志向を変化させる集団構造の違いを示す大きな条件となっていたといえよう。

V・Aとして存在する以上矛盾の構造をもっているものだとするならば、これらの矛盾＝活動上でみれば「困難」の存在に対して発揮されるメンバー相互の働きかけは、インフォーマルであったとしてもまさに教育の活動である<sup>(8)</sup>。個人の経験主義的なものよせ集めであろうとも、総括、普遍化、批判等を通じて集団の教育力が現出するのである。サークル的人間関係の中でこそ、経験・体験をとうした個人の実感を尊重しつつ、それだけに終わらせない集団の教育力が発揮されたことを示している。この過程に持続的に関与した個人はV・Aを通じての発達を体験できた個人である。フォーマルな教育体制をもつ組織（運動体など）とは違って、個人が直接的に志向の変化を含む発達—それは個人を「崩壊」させることにつながるが—に結びつきはしないが、発達に向けての条件を創り出していることであり、インフォーマルな教育であっても志向性の変化を実現させる可能性を拓いている。

そこで、V・Aでの活動を通じて発達していけるような個人を作り出すための条件として、次の点があげられよう。第1に、V・Aが個人にとって「崩壊」させることが可能であるような存在形態であることである。この点は民主的運営は言うに及ばず、V・Aとしての基本理念が貫徹されていることが条件である。サークル志向、ヴォランティアゼーションの示している意義である。第2に、「崩壊」させる意味をV・Aが持っていることがあげられる。集団のもつ意義とその実現に向かって関与する主体性の形成の条件である。外に向かって開かれた集団であることなど運動志向の存在と、多様なメンバーを受け入れることができる教育のシステムの確立が示している意義である。一見矛盾に見えるこの2条件は、V・Aの基礎構造からすると並立することが可能である。むしろこの2条件があつてこそV・Aにおける教育実践が展開するのであり、集団構造と主体形成（教育における意義）が深く関わっていることを理解することができる。

V・Aにおいて、余暇善用志向の克服やサークル志向からの前進（タコツボ化からの脱却）を課題とするならば、以上の点を考慮する必要がある。第1の画期を実現した主力である前期集団②の多くは、この条件のもとで志向性の変化を創り出し、V・Aを通じての発達＝主体形成を実現したのである。一方、第2の画期においては、運動志向と集団の変化の関連が整合的にとらえられたとは言い難く、「持続の論理」は否定されなかった。サークル志向の個人を崩壊させることなく「運動化」する事は不可能であり、集団自体がいかにも明示的な課題をもったとしても、主体形成とは無関係の状態で開催されることになったのである。さらに、全体的にみて平均の在籍期間はそう長くはなく、青年期において「卒業」を強制する要因はたくさんある。適合しないままで多くの個人は「次」を探るか自己に埋没するかかの道をたどる傾向を示している。都市部における青年の活動を見た場合推測できることであろう。以上からみて、V・Aを通じた青年の発達において次のような課題が結論できる。

V・Aは活動のための組織であつて成員の教育を目的とした組織ではない。青年による総合サークルにみられるような、余暇善用志向の克服をめざして「自分達の生活を考え、社会の問題を話し合つて、ものの見方、考え方を身につけていく中で、人間として成長していく<sup>(9)</sup>」ための教育活動自体は直接の目標になり難い。よつて、集団内の教育の力によつて、活動の持続性をもたらすという形態にはなりにくいのである。集団内での教育の善し悪しによつて発達が構成するという集団とは違った論理をもっていることに注目する必要がある。しかし一方では、持続的活動によつてのみ志向性の変化を中心とする態度変容＝発達が達成されるとするならば、V・A活動の持続性を保障する条件であつた、民主的運営や社会的条件の獲得を追求する中で教育のあり方を考えるということになる。理念主義的V・Aが実現している状況において、フォーマルな教育＝学習内容の教育プログラム化の実行が困難な状態であるならば、それらの力はV・Aの外に求めることも必要になってくる。他団体とりわけ運動型V・Aや文化運動体と言われるもの（事例の場合うたごえ運動や地域の文化運動体など）との関係であり、それらとの関係のあり方をどう創り出して行くのがV・Aにとっての課題となる。V・Aという集団を通じての成員の発達の問題は、V・Aそれ自体の集団だけで考えるのではなく、V・Aでの活動自体が本来「外」とのつながりを通じてしか発展しないものだというこ

とから検討されるべきではないか。地域での活動団体は、シングルイシューからグローバルな思考に目を転じて行かないと集団自体の発展がないと言われているが、市民運動的な団体だけではなく理念主義型V・Aにあっても、同じことがいえると思える。「皆と一緒に楽しく歌を歌いたい」というごく当たり前の要求(それは「要求」と言うほどのものでなく人間として文化的に生きるための基本的姿かもしれない)でさえも、満足に実現するためにさまざまな困難が存在する。「若者はなぜ集まってこないのだろう」「結婚するとなぜ歌えなくなってしまうのだろう」「歌う場所がなぜ少ないのだろう」「練習場所がなぜないのだろう」、そのことを一つ一つ真剣に追求して行けば、「私たちは何を歌えばいいのだろう」「条件はどう切り拓かれるのだろう」と言うように、学習内容や社会的条件についての課題として深化されざるを得ない。いわば、文化的要求から学習運動的、社会運動的方向に進むことによって自分達の要求を実現するというスタイルの可能性がある。事実、後期集団だけをとって、文化運動ばかりでなく、婦人運動、平和運動、社会福祉運動、労働運動、教育運動とのつながりを積極的にもっていたときに、サークルの発展がみられたのである。そこには、団員の量や合唱の質ばかりではなく、個人の志向性自体に対しても具体的な活動・行動を通じて(経験主義的ではあっても)影響を及ぼしていたといえるであろう。V・Aにおける発達とはこの過程を意識した個人によって達成される。活動の持続と持続した中でのみ可能な教育活動、V・Aの特質を問題にするのならば、以上の過程の実行にともなう集団の作り替えとそれにともなう個人の変革が実現するという構造を示している。逆に考えれば、文化運動体である集団自体の課題でもあり、地域サークル協議会的組織の青年期を中心とする集団に対する意義を提起するものになっている。V・Aは運動体にとって、決して「とりこまれる」というだけの存在ではない。

#### 注

- (1)高旗正人、讃岐幸治、住岡英毅編『人間発達の社会学』(アカデミア出版会 1983年)等参照。
- (2)E・H・エリクソン、仁科弥生訳『幼児期と社会』(みすず書房 1977年)等参照。
- (3)集団別の分類を細かくみると、第4回総会以前に退団したもの=集団I、第4回総会以前に入団して第4回総会以降に退団したもの=集団II、第4回総会以降に入団して退団したもの=集団III、第2期、第3期にわたって在籍したもの=集団IV、第3期のみ在籍したもの=集団V、に分類することが可能である。すなわち、いくつかの画期にわたって在籍したものとそうでないものを分けて考えた場合である。(時期別の分類に対応させると、集団IとIIが第1期、集団IIIとIVが第2期、集団IVが第3期の入団者に当たる)しかし、これまで見てきたように、第1期と2、3期の間には明確な集団構成上の差異があるのに対し、2期と3期の集団にはそれが見られない。例えば、属性、経験、志向性等を見ても、 $P=0.05$ の $\chi^2$ 検定では、入団者属性 $=3.6 < \chi^2$ 、学歴 $=7.6 < \chi^2$ 、入団時経験 $=2.8 < \chi^2$ 、入団時志向 $=0.12 < \chi^2$ 、を示している。よって、2度の画期があったとはいえ、1期と2期での断絶に比べて、2、3期は属性において棄却検定が成立しない。むしろ連続的な変化として考察することが可能である。それぞれ、前期集団(1期)、後期集団(2、3期)として把握すべきであることが結論づけられる。
- (4)前期集団①、②には運動経験者がそれぞれ26名(56.5%)22名(61.1%)と高い割合を示しているのに対し、後期集団では15名(21.7%)と低くなっている。退団後に運動に加わっていったのは前期集団①20名(28.0%内運動経験者15名)、後期集団11名(15.9%同4名)であるのに対し、前期集団②では23名(63.9%同20名)となっており、運動への参加率は前期集団②が圧倒しているが、未経験者の志向変化ということになると後期集団の割合が高い。しかし、在籍年数でみると、3年以上在籍者はそれぞれ5(6.9%)、23(63.9%)、12(17.4%)名いるが、そのうち退団後運動へ参加していったものは、前期集団がそれぞれ4名、15名と、3年以上在籍者の8割程度を占めているのに対し、後期集団ではわずか1名に留まっている。長くやっているものが運動へ志向を変化させるという結果は、後期集団に対しては当てはまらないといえよう。
- (5)大衆の自己形成の観点からサークルの意義を検討した長浜功は、うたごえ運動に言及して、「生活実感—文化要求、日常性のレベルと歴史的現実認識—価値選択水準、政治的水準とは全く相入れないものなのかどうか、という難問をうたごえ運動は解決できなかった」と述べ、商業化(流行歌手による超通俗化)とタコ壺化(うたごえ喫茶におけるウサばらし)の道をたどったと指摘している。長浜「大衆における自己形成の思想」『北海道大学教育学部紀要』第18号 1971年
- (6)D. L. Sills, *The Volunteers: Means and Ends in a National Organization*, Free Press, 1957
- (7)サークル活動を中心とした経験主義的方法を基に社会教育実践理論を展開したものに、笹島保の「茂木式経験

主義理論」がある。詳しくは拙稿「地域的教育思想の形成と展開」（「地域と教育」調査研究会編『地域と教育』国土社 1988年 所収）参照。

- (8)自己教育を展開させるための「教育力」としては、①最も制度化されたものとしての公教育、②「政治」の過程における教育(大衆運動の教育的側面と呼ばれるもの)、③集団の発展の内に発生してくるもの、の3形態が考えられる。このうち第3ものは、さまざまな要求の基に発生してくる自己教育が、その課題を追求する中で「教育者」の存在を要求し、それを確認する過程で引き起こされるものであり、公教育に比べればインフォーマルな面が多いとしても、教育実践の過程として認められるものである。拙稿「社会教育実践における“地域”に関する一考察」（日本社会教育学会編『日本社会教育学会紀要』No.16 1980年）参照。
- (9)名古屋サークル連絡協議会の実践の中から生み出された方法である。『現代社会教育実践講座』第3巻(民衆社 1974年)等参考。
- (10)第17会地域・自治体問題研究全国大会（1988年）における報告と討論の中で、ニューヨーク市立大学の W. K. Tabb 教授は“Think Globally, Act Locally”と述べて、地域運動の現代的課題を提起した。